

追悼の言葉

ミリアム・ロム・シルバーバーグは長い療養生活の後、2008年3月16日日曜日の未明に他界した。

ミリアムは東京で成長期を過ごし、東京の聖心インターナショナルスクールに通った。その後米国に帰国し、ジョージタウン大学で修士号、シカゴ大学で博士号(1984年)を取得し、ジョン・ウィテック、ハリー・ハルトウニアン、テツオ・ナジタ、藤田省三、藤目ゆきのような歴史学者やピーター・ラビノウイツ、マサオ・ミヨシ、ビル・シブリー、前田愛のような文学界の人々と交友関係を築いた。

ミリアムは太平洋をはさむ両岸で、全生涯の歩みを通して、無数の同僚たち、学生たち、社会活動家たちに深い影響を与えた。

彼女の著作“Changing Song: the Marxist Manifestos of Nakano Shigeharu”はジョン・フェアバンク東アジア歴史学賞を受賞し、1998年に日本語に翻訳され(邦題『中野重治とモダン・マルクス主義』)、文学と歴史学が専制的な専門分野の本拠地から解き放たれたときに発揮する桁外れの力を実証した。

同書は依然として、いかに社会批評として文学を読むべきかを示す比類ない模範である。

ミリアムは同時に、最も自覚的に理論的な近代日本史家の一人であった。

彼女は中野重治と佐多稲子のような反抗する人物たちの努力を肯定する際であれ、消費者や批評家や労働者や知識人としての女性たちの形成を探索する際であれ、主観性の探索に固く結ばれた仕事をし続けた。

日本の「モダン・ガール」に関する画期的な著作“The Modern Girl as Millitant,” “The Café Waitress Sang the Blues”は国際的に有名である。

ミリアムの仕事の射程は広く、マルクス主義文学、大戦間期の大衆文化、都市社会の勃興、日本の植民地遭遇、現代のポピュラーカルチャーに及んだ。

近代性と帝国主義の結びつきに対するミリアムの変わらぬ関心が、彼女の卓越したキャリアの初めと終りに表出している。彼女がジョージタウン大学で研究を開始

したのは、1923年の関東大震災直後の東京と横浜における朝鮮人虐殺に関する論文によってであった。そしてUCLAにおけるキャリアの最後には、「人種と文化」および「帝国についての日本のイデオロギー」のようなコースにおいて植民地遭遇を研究していた。

ミリアムの学者としての仕事には知的ダイナミズムが非常に明白であった。彼女はUCLA女性学センター所長として在任中、センターにそれをもたらした。ミリアムの世話でさまざまなワークショップやイベントが催された。そのなかには、元朝日新聞記者で日本軍性奴隷制度を裁く女性国際戦犯法廷の代表であった松井やよりのトークもあれば、ミリアム自身のパーキンソン病との対決を学問的・人間的障害学へと折り込んだ「身体障害と直面するフェミニズム」と題する、通念を根底から覆すような学会もあった。

国際的な名声を持つ一学者としておそらく非常に希有だったのは、ミリアムが自分の学生に高い優先順位を与えたことであった。

特にパーキンソン病のために日本戦間期の大衆文化に関する名著“*Erotic Grotesque Nonsense*” (U. C. Press, 2007)の完成はもちろんのこと、座って講義を行うことも困難になっていた最後の数年間はそうだった。ミリアムはもはや誰かの補助なしに書くことができなくなったときさえ、学生たちのために推薦や助言や案内のために書いていた。

ミリアムの日々が無慈悲な監禁状態の連続になったとき、真っ先に学生たちが、そして同僚たちや友人たちが、大西洋や太平洋を越えて、また全国の大小の大学町からミリアムを見舞いに訪ねた。訪れた人々は時には集団で、またしばしば一人だけで、言葉を発するどころか、瞬きさえ出来ないミリアムとコミュニケーションする方法を見つけ出したものだ。それは、ミリアムが教え導いたり、一緒に食事をしたり笑ったり彼女の抑えがたい才気を分かち合った人々がみな彼女から並はずれた影響を受けたことの静粛で感動的な証左だった。

ジェームズ・フジイ